

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十四巻第十号（通巻第一六六号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第166号

2. 2008

初狂言

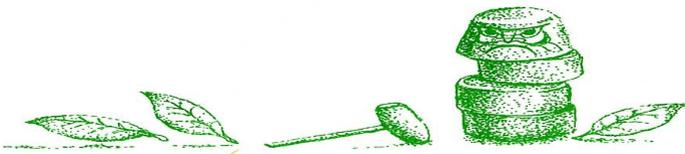
品川 鈴子

須磨浦の筵ひびは天女の歌留多なる

須磨の筵歌留多並びのやや乱れ

葉牡丹の干支一巡り地震跡

とんど火へ抛り込まれる領収書



初笑ひ 眦めじりの皺に 泪ぐむ

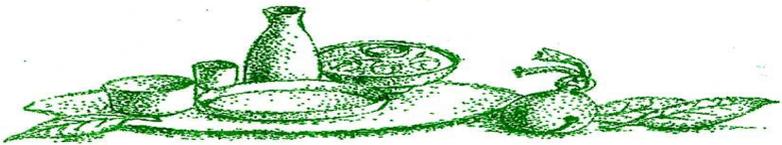
初狂言 先々代のおどけ振り

初狂言 妬きて 荒ぶる 足拍子

首すくめ 妻に 蹴らるる 初狂言

初狂言 騙され 易き ずつぱ者

初狂言 はね 八階で 車座に



# 第十一回ぐろっけ賞発

受賞作品

俳句の部

玉の汗

藤井久仁子

朴の花花蕊の海を高みより  
宙に浮く三点確保玉の汗  
沸点の違ふシチューや夏の月  
槍岳への鎖場前に三尺寝  
手放せぬ洗ひ晒しの登山帽  
稜線に立つや喝采霧晴れる  
間の広き男のラッセル役立たず

受賞作品

俳句の部

第二の人生

高橋大三

春浅き今日の面接首尾いかに  
乳母車から脚振る児かきつばた  
噴水は伸ばす児の手の高さまで  
北斎の竜虎睨ねめあふ雷鳴に  
長き夜を行書フォントで手習ひす  
背びれ浮く緋鯉潜水艦に似て  
玄室の巨石三段隙涼し

# 玉

# 鈴

# 吟

香川 齋部 千里

背なに頭を入れて白鳥眠りゐる  
洗濯ものぎつしりと干し冬ぬくし  
新藁に起き伏し牛の乳が増す  
柚子風呂に浸りて農の疲れとる  
紅葉祭巫女がもみぢ持ちて舞ふ

兵庫 浮田 胤子

神戸港飛魚水先案内す  
稲雀追はれてどつとトランスへ  
大阪はぬくいと老婆一人住む  
露しとど銀一色の芒原  
どうしようこんな糸瓜ぶら下り

兵庫 馬越 幸子

天高し魚呑みこみし鷺の首  
鴨の陣張るほどもなき数なりし  
城壘の裾輪に石菝の黄を凝らす  
菊花展懸崖菊の盾並らべ  
マント被て小便小僧独りきり

大阪 大井 邦子

菓子袋持つ子へ鹿は一目散  
草相撲爺が耳うち勝の技  
童女の細き足もて草相撲  
子午線の子方に向きて枯蟻螂  
肖像の眉は弓形冬ぬくし

東京 大川富美子

戻らざる日々を増やして暦果つ  
暮れぎはの空の白さよ冬はじめ  
街へ出てついでの多き師走かな  
目に見えぬものに追はれて年暮るる  
句作りのはしくれに生き日記買ふ

香川 大空純子

宿題を忘れ花野を引き返す  
体温を感じつつ取る草虱  
鱗雲小さき幸せ幾千も  
新聞夫広き歩幅を秋霖に  
菊花展作者労う江戸小紋

兵庫 岡 有志

欺かれしか世に生きて落葉焚く  
叙勲者に級友あるよ文化の日  
心電 凶病態論じあふ夜長  
芦刈るは女の業か舟に積む  
説教は受胎告知ぞ待降節

埼玉 岡田 章子

育ちすぎの小松菜を抱き裾分けす  
紅葉山日本武尊の越えし径  
魯田の続く吉備路の五重塔  
法要の木魚の聞え散紅葉  
うぐひす張りの廊下賑はひ寺小春

大阪 岡本 幸枝

山の辺の白壁厚し冬隣  
秋うらら地獄絵なれど笑ひ声  
依代の根上り松にばつた住む  
大三輪の数珠玉に欲し柿の色  
纏向山繰り出すように鯛雲

大阪 奥田 妙子

バスの窓ようやく出でし寝待月  
穴まどひ池の囲りで出くはせり  
店先に太刀魚跳ねる魚棚  
渦巻かぬ鳴門海峡秋惜しむ  
イケメンも足短かくす阿波踊

兵庫 勝野 薫

海遙か風に色なき美土呂丘  
昼網の太刀魚並べ声囁らす  
加古川の岸に青鷺衛士のごと  
秋天の遍ねし馬場の大鏡  
砥峰の芒野高原向ひ風

兵庫 加藤 奈那

ひよんの笛ひとりの時に吹いてみる  
一株を蛸に仕立てり菊花展  
菊師たちもう来年のこと言へり  
ふるさとにふと似し車窓柿花火  
遠山に細き昼月返り花

兵庫 金田 美恵子

弓神事凍てし産土まづ祓ふ  
弓始射手の目差し的を抜く  
水洩を啜りて蹲踞守りたる  
弓始「矢当」と記す的日記  
弓神事見守る禰宜の懐手

河井 富美子

句作りやこと芋煮午下がり  
兎の耳もしろがねなりし昼の月  
干蛸や頭のわたぬかれ足くねる  
美術館出れば時雨の石畳  
剪定を終えたる庭に秋の蝶

# 薬草歳時記

(一六五) トコロ(野老)、オニトコロ(鬼野老)

須賀悦子

この山のかなしき告げよ野老掘

松尾芭蕉

この歳時記の挿絵を描くために六甲山の神戸市立森林植物園の専門の先生には植物のある場所、花の時期等今までもいろいろとご親切に教えて頂いておりましたが、この度の『トコロ』も七月中旬に森林植物園を訪ね伺ったところ「植物園の中にはありませんが、外の道路脇に見かけましたので…」とトコロの茂つて今が花盛りという場所に園の仕事が終わった後、車で連れて行って下さいました。

「あら、こんなところに…」と思う道端に車を止めて崖になつている道路脇の雑木の中をみますと柵や樹に確りと巻き付いている鬼トコロが上へと伸びて小さな黄緑色の花を咲かせて居りました。こつちが雌花、あちらが雄花と丁寧に教えて頂き、スケッチ用に写真を撮り見本を貰つて帰りました。多年生の上昇蔓草で雌雄異株、山の薯と外形はよく似ていますが、葉の形、花のつき方がすこし違い、根茎は地下に横行して長い鬚根を生じます。昔は精のつく食べ物として春に掘られていましたが、薬用としては秋に掘

り上げ水洗後、縦割りにして日干しにしたものを水で煎じて消炎、利尿薬としてリウマチや腰、膝の疼痛に用いられておりました。牧野薬草大図鑑に因りますと、根茎の成分のステロイドサポニンのジオスチンが血球溶解毒と判り局所刺激性があり、犬、猫に与えると直ちに嘔吐する等、飲み過ぎると胃腸の粘膜が爛れるので要注意です。

古く万葉集に

皇祖の神の宮人ところづら

いや常しくに我かへり見む

卷七一一三三

源氏物語にも「野老」が山の産物として、筍と同じように贈りものにされていたらしく、横笛の巻に

御寺の近くの林に生えた筍、その辺りの山で掘った野老などをいかにも田舎のものらしく風流であるからと

…云々

朱雀院

世を別れ入りなん道はおくるとも

同じところを君もたづねよ

と詠まれています。お正月の飾りのひとつに老人の長寿を祝う縁起物としての海の「海老」と山の「野老」を蓬莱盆に載せて飾ります。季語として「野老飾」は新年、「野老掘」は三春となります。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

「やまと花万葉」 東方出版 / 「源氏物語の庭」 城南宮

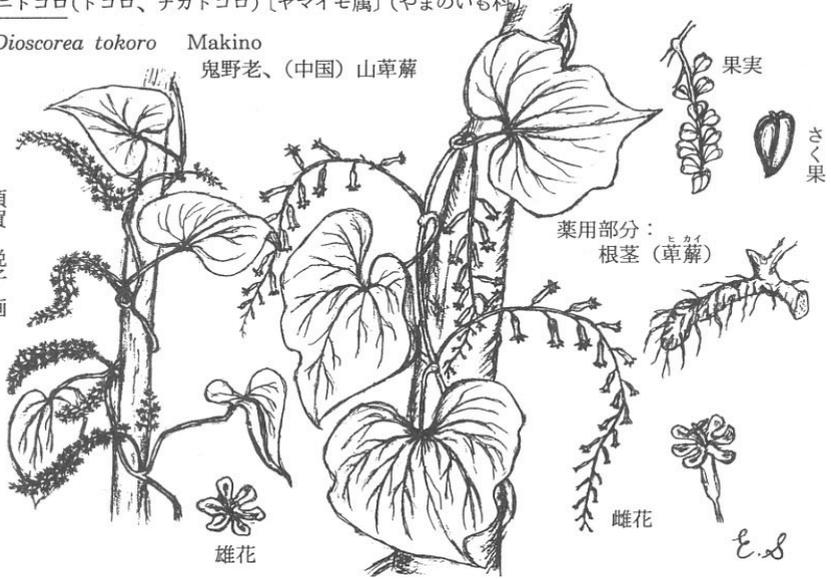
著者略歴 神戸薬科大学卒

オニトコロ(トコロ、ナガトコロ)〔ヤマイモ属〕(やまのいも科)

*Dioscorea tokoro* Makino

鬼野老、(中国)山萆薢

須賀  
悦子画



野老掘己れが髭も結ぶなる  
 得たる所得ぬ野老ある山辺かな  
 野老うる声大原の里びたり  
 朱を研ぐや蓬萊の野老人間に落  
 われともに三幅対や海老ところ  
 ひげの砂こぼし野老を飾りけり  
 野老掘り山々は丈あらそわず  
 野老掘る鋏に邪魔の根絡まりて  
 仙人のごとき野老を掘り出せり  
 車止め柵に野老の伸び放題

黒柳 召波  
 岡西 惟中  
 宝井 其角  
 炭 太祇  
 圃 什  
 沢木 欣一  
 飯田 龍太  
 勝野 薫  
 塩出 眞一  
 須賀 悦子  
(ぐろっけ)  
(ぐろっけ)

# 鈴の奏

品川鈴子選

金髪を垂らして拾ふ木の实坂  
能衣裳めける蓼虫夕そよぎ  
兵庫 中村 碧泉

わがズボン磁石のごとし草じらみ  
汝一管われ一調の秋の夜  
里古りて庭の椎茸茶碗ほど  
兵庫 唐鎌光太郎

微笑みの観世音像見し小春  
ストープにやかんの置き場定まれる  
店の客ふり向かせたる我がくしやみ  
かまきりをつかみ損ねて指咬まれ  
兵庫 松村紀久男

新走り翫摺唄は五人衆  
祭舟白装束の少女舞ひ  
少年のリップクリーム秋暑し  
お下げ髪解き放される花野揺れ  
大阪 静 寿美子

秋麗ら手話の語らひティーサロン  
駆け抜けて笑顔はじける運動会  
介助犬じつと待ちゐる背に飛蝗  
背を丸め母は熟柿の皮をはぎ  
兵庫 伊勢ただし

おむつの子列なし菊見相楽園  
昼網の黒鯛が値札を跳ね飛ばす  
朝市に女の化粧濃かりけり  
湖に朱の帯引きて秋入日  
東京 遠藤とも子

秋風の埋木舎にわれひとり  
姉いもと女二人となる時雨  
ひつじ雲刃たりしかわがことば  
椋鳥の羽音一斉甲子園  
大阪 井上あき子

春うらら木鼻に猫は眠りいて  
托鉢に卍巴の都鳥  
菜の花忌嘉兵衛の碑は沖見渡す  
ちゃんちゃんこ女々しいころ直隠し  
大阪 藤澤希宗子

赤蜻蛉縫れる二羽に肩を貸す  
羽根破れ秋蝶ひくく靴に来る  
秋桜はカメラ目線にフラダンス  
案内図の社は荒れて赤のまま  
兵庫 四葉 允子  
唐突に藤豆弾け音高く

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 小林 玲子 //

\*選句は全て 品川鈴子

に辟易しながら傍観している旧世代。

わがズボン磁石のごとし草じらみ

中村 碧泉

吟行帰りのズボンには、何処からか沢山の草風がくつついて離れない。それは磁石の陽極と陰極が引き合うように、完璧な付着振り。小さな草に備わる繁殖の知恵に感動する。

店の客ふり向かせたる我がくしやみ 唐鎌光太郎

くしやみは自制できない生理現象で、時も所も選ばない。たまたま品の良い店構えに魅かれて坐った茶房などで、出し抜けにあられもない大呼吸の爆発。閑静に憩う客らの視線を、一斉に浴びてしまい、身も縮みそうになる。

少年のリップクリーム秋暑し

松村紀久男

当節の若者は男性もおしゃれで、身だしなみに気を使わらしい。年端もゆかぬ華奢な少年が、人前も憚らず唇の手入れに余念が無い。残暑がまだ去らず、遣りきれない暑さ

お下げ髪解き放される花野揺れ 静 寿美子

環境の変化で都市周辺に、花野を見る事は少ない。そこでは虫の声や風の動きが趣を添えているが、一抹の寂しさ、哀れさが潜む。

それまで固く編んでいた長い髪を、花野の風に解いた。それは胸深く抱えていた、こだわりや束縛から自身を解放した瞬間でもあった。句集『水中花』に

深き溝ありて花野をひきかへす 鈴子 がある。

背を丸め母は熟柿の皮をはぎ 伊勢ただし

柿の実が熟れきつたものを熟柿とよぶ。熟柿になるとナイフで皮をむく事は出来ず、皮を剥ぎスプーン等で掬って食べる。幾つになっても生活の折々に、母親の仕草や言葉がなつかしく甦る。

——母居ませば——好物だったこの熟柿を——の思いが消えない。

巴と表現。言葉選びが巧み。

卍巴Ⅱ追いかけてあうように入り乱れる様子

秋風の埋木舎にわれひとり

遠藤とも子

赤蜻蛉纏れる二羽に肩を貸す

藤澤希宗子

彦根駅から山城を見上げ乍ら「いろは松」並木を抜け埋木舎へ。

井伊直弼が部屋住みの青春時代十五年間を過ごした館。三百俵の拾人扶持で生涯を終えることなく、大老職に迄昇りつめ、安政の大獄から水戸浪士に暗殺されるという波瀾万丈の人生を偲び、御自身の来し方を思い、一時を過ごされたのでしょうか。季語の秋風が動かない。

秋茜、深山茜、姫茜等の総称で赤蜻蛉。成熟すると腹が赤くなり、雄は特に鮮やかになる。夏は山で過ごし、秋には里に下りて来る。

纏れあう雄雌の赤蜻蛉が、肩先に止まった。静かにそおーつと成り行きを見守る。肩を貸す、にやさしさが滲む。

托鉢に卍巴の都鳥

井上あき子

唐突に藤豆弾け音高く

四葉 允子

鳥類学のミヤコドリとユリカモメは、別種であるが古来詩歌の上では、百合鷗をさして都鳥と呼んでいる。業平が隅田川辺で詠んだ短歌はつとに有名。

京都四条大橋のたもとでは、よく托鉢僧を見かける。その鴨川には一年通して百合鷗が居着いているが、南座にまねきが掲がる頃にはその数を増し、乱舞する。その姿を卍

藤豆はマメ科の一年生蔓草。アジア、アフリカの原産で広く栽培されている。花は白か紫色の蝶形で藤に似て房状に咲く。

前ふれもなく藤豆が弾けた。どんな音だったのだろうか。音高く弾けたのだから、ポンか、パシッか？想像がふくらむ。

(以下略)